

はじめに

金龍オレニアックスは、聖フランチェスコの守り神として知られている。聖フランチェスコ聖池のそばで今も眠り続けるその姿は、生ける伝説と呼ぶにふさわしい。

聖オレニアックス剣術学校は、そんな金龍に名前をもらった市立の学校だ。剣術学校といっても、昔と違って剣術そのものは学校の授業の一部となっている。今のオレニアックスは、旅のエキスパートを育てるための場所だ。

五歳から一五歳までの一〇年間を、君はこの学校で過ごした。鬼教官の**マチルダ先生**にじごかれて大きくなった君には、七人の仲間がいた。**ヘイル**。**ニナ**。**アヴィオン**。**ベルナデッタ**。**マグス**。**レム**。**レス**。**ガリイ**。多様な出自、種族と役割だったが、仲のいい気心の知れた同級生だった。

五歳、そう、五歳と言えば、君たちにとって因縁の歳でもある。**悪魔ガルアーダ**が姿をあらわし、「**制天の塔**」と呼ばれる市外の古い塔を占拠したのも、君が五歳のときだった。ガルアーダはその後、軍隊を引き連れて聖フランチェスコの外壁までやってきた。ガルアーダはマンティコア（老人の顔と獅子の身体、サソリの尾、コウモリの羽根を持つ怪物）そっくりの外見をしていたが、よく通り響く声で、聖フランチェスコ領内にある塔の今後の領有を主張した。市参事会はガルアーダ討つべしとの意見に

まとまったが、返り討ちにあい何もできぬまま現在に至る。

あれから一五年。塔内に住む悪魔ガルアーダを倒すべく、オレニアックス剣術学校出身の八人の勇者が集められた。「怪盗」の異名を持つガリイ・ザ・ダークだけは来られなかったが、七人の仲間は久しぶりに顔を合わせ、懐かしさに胸が熱くなる思いをした。

学校一の人気者だった、剣士ヘイル。「ゴーレム剣士」と呼ばれる彼は木材と金属でできた身体の持ち主で、剣術学校では大人気だった。外見の格好良さだけでなく、実際中身もいい奴だった。呼び名は「ヘイル」。

今はくさびらの森のほとりに住むアヴィオンは、朴訥としたい男だ。無口で純朴で、善の心を持った狩人。あだ名は「ハチドリ」。

学校に入った頃からすでに大人だったエルフのニナは、「お姉さん」と呼ばれていた。皆より相当年上で、実際に一緒に授業を受けるようになったのは一二歳の頃からだった。思春期の同級生の男どもには、その大人びた風貌が強い刺激だった。何かわけがあつて学校に所属していたらしい。呼び出しに応じて駆けつけて来てくれた。

聖女ベルナデッタ。信仰心の深さで知られる、色白できゃしゃな、背の低い女性。口べたな田舎生まれで、質素だがお洒落が大好き。男性からの人気もあった。同じぐらい無口な狩人アヴィオンとワサの流れた時期もあったのに、ベルナデッタは卒業後すぐに僧籍に入ってしまった。俗世との関わりを断ち、僧侶としての道を歩んだのだ。通称「ベル」。

錬金術師マグス。ドラッツェン出身の母と、フランチェスコ出身の父を持つ男。貴族の妾腹（めかけばら）の子で、厄介払いも同然にこの学校に放り込まれたはぐれ者。しかし、悪賢くて仲間を大切にするその性格から友だちは多かった。通称「マグス」。

レムレスは大魔術師レムタスの息子だ。レムタスは大貴族だから、つまり貴族の血を引く高貴な身分。学校一の毛並みの良さを誇っていた。鼻にかけたような嫌みさはなかったが、強い自尊心（プライド）の持ち主だった。勉学熱心。思い込むと周りが見えなくなる。エリートくさはあったものの、専門知識に対する勉強量がすごく、周りには尊敬されていた。通称「坊ちゃん」。

今はここにいないが、ガリイ・ザ・ダーク。交易商の息子。船乗りであり商人でもある父親のもとを離れ、歳下にも関わらず君の学年に入ってきた変わり者。サブライズ好きで、誕生日の仕掛けは全部ガリイが組んだ。女子寮にバラの花を届けたり、英雄好きなヘイルに古い英雄の剣をプレゼントしたりと、サブリス精神に富んだ奴だった。卒業と同時に両親ともども行方不明になったと聞いていたが、市参事会が行き先を掴んでいたとは。しかし、ガリイは「遅刻」している。間に合うといいが。通称「怪盗ダーク」または「ガリイ」。

旧交を暖めあったのはいいが、これは同窓会ではない。制天の塔を登り、ガルアーダを滅ぼすために集まったのだ。一度に全員で塔内に入ると怪しまれるため、バラバラにタイミングをずらして塔に入ることに決まった。くじ引きの結果、最後に入るのが君だ。いや、ガリイ・ザ・ダークが間に合うかもしれないから、最後と決まったわけではない。

さあ、冒険の始まりだ。 **一へ進め。** 君と仲間がうまくガルアーダに打ち勝つことができますように。 エスパダとエスクード、二人の神様があなたにはほ笑んでくれるように。